

# 漢語荊州方言の文白異読について<sup>1</sup>

劉凌霄

## 摘要

荊州方言属于西南官话成渝片，兼具南北方言的特点。荊州方言中一部分字词存在文白异读现象。所谓“文白异读”是指一个汉字有文白两种读音。一种是读书音，即读这个汉字时候的发音，这种读音被称为“文读音”，又称为“文言音”。另外一种 is 口语音，这种读音被称为“白读音”，又称为“白话音”（王力 1997:572-573）。荊州方言的文白异读现象共分为四种，分别是保留汉语中古音的白读音、由中古音变化而来的白读音、特定词汇的白读音和同字异调的白读音。本文将对这四种类型的文白异读现象进行深入分析，并与以《切韵》为代表的中古音进行对比研究，从而通过荊州方言的文白异读现象的研究来探索其历史音韵变化的规律。通过荊州方言文白异读现象的研究，不仅可以夯实描述语言学的基础知识，对汉语方言学的理论的掌握起到一定的辅助作用，还可以进一步探究历史比较语言学所蕴藏的奥妙。

**关键词：**荊州方言；文白异读；中古音；历史音韵变化

## 1. はじめに

### 1.1 荊州方言の概況

荊州市は中国の湖北省の中南部の江漢平原の長江の北岸に位置する都市である。総人口は 690 万であり、湖北省の第三位である。荊州方言は漢語西南官話の成渝片に属し、荊州市の荊州区・沙市区・江陵県に分布している（王群生 1994:9-16）。

筆者はこれまでに荊州方言の音韻の調査<sup>2</sup>を行った。荊州方言には 16 個の声母/p,ph,t,th,k,kh;f,s,e,x;te,teh,ts,tsh;m;l/があり、32 個の韻母/a,o,ə,i,u,y,u;ai,au,

---

<sup>1</sup> 本研究は筆者が日本中国語学会第 70 回全国大会で発表した《荊州方言文白异读现象的研究》を日本語に翻訳し、加筆と修正をしたものである。

<sup>2</sup> 2019 年 8 月に筆者は荊州の現地でフィールド調査を行った。その際、母語話者に協力を仰ぎ、録音作業を行った。収集したデータを分析し、荊州方言の声母・韻母・声調の音韻体系を整理した。

ou,əi,ia,iə,io,iau,iou,ua,uo,uai,uəi,yə;an,ən,in,iən,iaŋ,uŋ,uan,uən,yn,yŋ,yən/があり、4 個の声調（陰平 55・陽平 213・上声 42・去声 35）がある。

## 1.2 研究背景

多くの漢語方言では文白異読の現象が存在する。特に呉方言と閩方言に顕著である。文白異読とは1個の漢字に漢字音が2個ある現象を指す。1つは文読であり、これは読書音（字を読むときの発音）である。もう1つは白読であり、これは口語音である（王力 1997:572-573）。例えば、閩南方言における〈名目〉「名目」の〈名〉は文読で[biŋ<sup>24</sup>]と読まれるが、〈名声〉「世間の評判」の〈名〉は白読で[mia<sup>24</sup>]と読まれる。また、閩南方言には同一の字であるものの、音価も意味も異なる語彙が存在する。例えば、閩南方言で〈大人〉は文読音で[tai<sup>22</sup>lin<sup>24</sup>]と読まれ、意味は「役人」となる。一方で、白読音で[tua<sup>22</sup>lan<sup>24</sup>]と読まれ、意味は「成人」となる（盧廣誠 2003:141-145）。

閩南方言の文読音は唐代の読書音より形成された一方、白読音は西晋の口語音より形成されたと考えられる（陳榮嵐，李熙泰 1994:19-31）。文読音と白読音の発展過程が異なるため、現代における両者の音価の差異は著しい。他方、本稿で扱う荊州方言では文白異読の現象が残るものの、結論から言えば、呉方言と閩方言に比べ、非常に少ない。

## 1.3 研究目的・意義

荊州方言における一部の漢字の白読音は通時的には保守的であると考えられるものがある。これらの中古音と比較し、詳しく検討すれば、荊州方言の言語変化の発展段階がより詳細に判明する可能性がある。

荊州方言の文白異読の記述を行うことで、荊州方言の共時・通時的な言語現象を総合的に捉えることとなり、特に西南官話の一変種の言語変容の理解が進んでいくものと考えられる。

## 1.4 先行研究と本稿の相違点

本研究と関係する主たる先行研究は王群生・王彩豫（2018）である。これは荊州市の荊州区の方言を対象とする研究である。2つの方言の間に差異が存在している。王群生・王彩豫（2018）では、荊州方言の文白異読の現象を5点に分けて検討した。1点目は日常的にありふれた字における文白異読である。日常生活でよく用いられる語彙の発音が変化し、白読音になったものである。2点目は標準語の影響で形成された文白異読である。標準語からの影響を受け、文読音になったものである。3点目は江漢平原の東部方言の影響

で形成された文白異読である。ここで言う江漢平原の東部方言とは特に武漢方言を指す。4 点目は中古音の影響で形成された文白異読である。ここで漢語中古音を保存している白読音を指す。5 点目はその他の特殊な文白異読である。ここでは<元・丸・肉・榮・日・六・跄・蹲>などの漢字の文白異読の現象が検討されている。王群生・王彩豫（2018）では、荊州方言の年齢層の差異及び荊州東辺腔<sup>3</sup>が荊州方言の文白異読に対して与えた影響について言及している。一般的に、年齢層が高い話者は若年層より通時的に保守的な白読音を用いる事例が多い。一方で、若年層は高年層に対して標準語からの影響で形成された文読音を用いることが多いということである。加えて、同じ荊州方言といっても、荊州区と沙市区に若干の違いが見られる。清代に満洲八旗の軍隊が荊州区で駐屯しており、荊州区到北京・東北方言を持ってきたゆえに、現在の荊州区の話者が用いる文読音の一部はその北京・東北方言の影響で形成するものである。しかし、沙市区にこれと同様の文読音がない。

本研究は王群生・王彩豫（2018）と以下の三点で異なる。第一に、先行研究に同字異調の文白異読の現象を検討していない。本研究は同字異調の文白異読の現象を検討してみる。第二に、先行研究では中古音を保存している白読音に言及しているが、中古音の音韻体系との通時的な分析を行っていない。本研究は中古音の音韻体系との対応関係から、荊州方言の言語変化の発展段階を理解してみる。第三に、先行研究では荊州区の方言（東辺腔の影響を受けている）を研究対象とするが、本研究は沙市区の方言（東辺腔の影響を受けていない）を研究対象とする。

荊州方言に文白異読の現象は以下の4つのパターンがある。以下、順に説明する。

## 2. 中古音を保存している白読

荊州方言で一部の「見母字」・「溪母字」・「匣母字」に2種の音価がある。1つは漢語中古音の体系に近く、荊州方言の白読音となるものである。特に「見母」・「匣母」の開口二等字は中古音の音価が残りやすい。これは漢語南方方言に広く存在する現象である。もう1つは現代中国語の標準語と類似した音価を持ち、荊州方言の文読音となるものである。

<sup>3</sup> 「東辺腔」とは清代に満洲八旗の軍隊が荊州に導入した北京・東北方言であった。しかし、「東辺腔」は民国期には消滅した。

## 2.1 見母字

荊州方言における「見母字」の文白異読の例を以下で見よう。

〈家〉は荊州方言で「母方の祖母」を呼ぶとき、〈家家〉と言い、白読で /ka<sup>55</sup>ka/[kɛ<sup>55</sup>kɛ] となる。その他の例では〈家〉が文読で /teia<sup>55</sup>/[teie<sup>55</sup>] となる。例えば、〈家庭〉「家庭」は文読で /teia<sup>55</sup>thin<sup>213</sup>/[teie<sup>55</sup>t<sup>h</sup>in<sup>213</sup>] となる。

〈夾〉は荊州方言で単独で動詞として用いるとき、白読で /ka<sup>213</sup>/[kɛ<sup>213</sup>] となる。例えば、〈夾起来〉「挟み上げる」は白読で /ka<sup>213</sup>tɕhi<sup>42</sup>lai<sup>213</sup>/[kɛ<sup>213</sup>tɕh<sup>42</sup>lai<sup>213</sup>] となる。その他の例では文読で /teia<sup>213</sup>/[teie<sup>213</sup>] となる。例えば、〈夾子〉「クリップ」は文読で /teia<sup>213</sup>tsi/[teie<sup>213</sup>tsɿ] となる。

〈间〉は荊州方言で助数詞として用いるとき、白読で /kan<sup>55</sup>/[kan<sup>55</sup>] となる。例えば：〈一间〉「ひと部屋」は /i<sup>213</sup>kan<sup>55</sup>/[i<sup>213</sup>kan<sup>55</sup>] となる。また、〈中间〉「中間」は白読で /tsuŋ<sup>55</sup>kan<sup>55</sup>/[tsuŋ<sup>55</sup>kan<sup>55</sup>] となる。その他の例では〈间〉が文読で /teia<sup>55</sup>/[teien<sup>55</sup>] となる。例えば、〈房间〉「居間」は文読で /fan<sup>213</sup>teia<sup>55</sup>/[fan<sup>213</sup>teien<sup>55</sup>] となる。

〈戒〉は荊州方言の白読では /kai<sup>35</sup>/[kai<sup>35</sup>] となる。例えば、〈戒子〉「指輪」は白読で /kai<sup>35</sup>tsi/[kai<sup>35</sup>tsɿ] となる。しかし、〈戒尺〉「教師が使う定規」は文読で /teia<sup>35</sup>tʂi<sup>213</sup>/[teie<sup>35</sup>tʂ<sup>h</sup>i<sup>213</sup>] となる。荊州方言で〈戒〉は文読で読まれる例は〈戒尺〉1 語しかない。

〈甲〉は荊州方言で〈指甲〉「指の爪」のみが白読で /tʂi<sup>213</sup>ka<sup>55</sup>/[tʂi<sup>213</sup>kɛ<sup>55</sup>] となる。その他の例では〈甲〉は文読で /teia<sup>213</sup>/[teie<sup>213</sup>] となる。例えば、〈甲等〉「いちばんよい」は文読で /teia<sup>213</sup>tɕn<sup>42</sup>/[teie<sup>213</sup>tɕn<sup>42</sup>] となる。

〈艰〉は荊州方言で〈艰难〉「非常に困難」のみが白読で /kan<sup>55</sup>lan<sup>213</sup>/[kan<sup>55</sup>lan<sup>213</sup>] となる。その他の例では〈艰〉は文読で /teia<sup>55</sup>/[teien<sup>55</sup>] となる。例えば、〈艰辛〉「とても苦しい」は文読で /teia<sup>55</sup>ein<sup>55</sup>/[teien<sup>55</sup>ein<sup>55</sup>] となる。

〈角〉は荊州方言の白読では /kuo<sup>213</sup>/[kuo<sup>213</sup>] となる。例えば、〈角落〉「隅」は白読で /kuo<sup>213</sup>lau<sup>55</sup>/[kuo<sup>213</sup>lau<sup>55</sup>] となる。しかし、〈主角〉「主人公」は文読で /tsu<sup>42</sup>teio<sup>213</sup>/[tsu<sup>42</sup>teio<sup>213</sup>] となる。また、〈角〉は貨幣単位を表す場合、文読で /teio<sup>213</sup>/[teio<sup>213</sup>] となる。例えば、〈一角钱〉「10 分の 1 の元」は /i<sup>213</sup>teio<sup>213</sup>tehien<sup>213</sup>/[i<sup>213</sup>teio<sup>213</sup>tehien<sup>213</sup>] となる。

〈叫〉は開口二等字ではないが、文白異読の現象が見られる。荊州方言で〈叫花子〉「乞食の人」のみは白読で /kau<sup>35</sup>xua<sup>55</sup>tsi/[kau<sup>35</sup>xue<sup>55</sup>tsɿ] となる。その他の例では〈叫〉は文読で /teiau<sup>35</sup>/[teiau<sup>35</sup>] となる。例えば、〈喊叫〉「叫ぶ」は文読で /xan<sup>42</sup>teiau<sup>35</sup>/[xan<sup>42</sup>teiau<sup>35</sup>] となる。

## 2.2 溪母字

荊州方言においてはごく一部の「溪母字」に文白異読の現象が見られる。具体例を以下で見ていこう。

<敲>は荊州方言で単独で動詞として用いるとき、白読で/khau<sup>55</sup>/[k<sup>h</sup>au<sup>55</sup>]となる。例えば、<敲门>「ドアを叩く」は白読で/khau<sup>55</sup>mən<sup>213</sup>/[k<sup>h</sup>au<sup>55</sup>mən<sup>213</sup>]となる。その他の例では文読で/tehiau<sup>55</sup>/[te<sup>h</sup>iau<sup>55</sup>]となる。例えば、<敲詐>「金品をゆすり取る」は文読で/tehiau<sup>55</sup>tʂa<sup>35</sup>/[te<sup>h</sup>iau<sup>55</sup>tʂe<sup>35</sup>]となる。

<嵌>は荊州方言で単独で動詞として用いるとき、白読で/khan<sup>55</sup>/[k<sup>h</sup>an<sup>55</sup>]となる。例えば、<嵌进去>「嵌め込む」は白読で/khan<sup>55</sup>tein<sup>35</sup>khw/[k<sup>h</sup>an<sup>55</sup>tein<sup>35</sup>k<sup>h</sup>w]となる。その他の例では文読で/tehien<sup>35</sup>/[te<sup>h</sup>ien<sup>35</sup>]となる。例えば、<镶嵌>「象眼する」は文読で/eiaŋ<sup>55</sup>tehien<sup>35</sup>/[eiaŋ<sup>55</sup>te<sup>h</sup>ien<sup>35</sup>]となる。

<去>は白読で/khu<sup>35</sup>/[k<sup>h</sup>u<sup>35</sup>]となる。例えば、<回去>「帰る」は白読で/xuəi<sup>213</sup>khū<sup>35</sup>/[xuəi<sup>213</sup>k<sup>h</sup>u<sup>35</sup>]となる。しかし、<去年>「昨年」は文読で/tehy<sup>35</sup>liən<sup>213</sup>/[te<sup>h</sup>y<sup>35</sup>liən<sup>213</sup>]となる。荊州方言で<去>は文読で読まれる例は<去年>1語しかない。

## 2.3 匣母字

荊州方言における「匣母字」の文白異読の例を以下で見ていこう。

<下>は荊州方言の白読で/xa<sup>42</sup>/[xə<sup>42</sup>]となるが、これは回数表現に現れる。例えば、<一下>は「一回」を表す。また、<底下>「下」は白読で/ti<sup>42</sup>xa<sup>55</sup>/[ti<sup>42</sup>xə<sup>55</sup>]となる。その他の例では<下>が文読で/eia<sup>35</sup>/[eie<sup>35</sup>]となる。例えば、<下面>「下の方」は文読で/eia<sup>35</sup>mien<sup>35</sup>/[eie<sup>35</sup>mien<sup>35</sup>]となる。

<蟹>は荊州方言で<螃蟹>「蟹」のみが白読で/phan<sup>213</sup>xai<sup>42</sup>/[p<sup>h</sup>an<sup>21</sup>xai<sup>42</sup>]となる。その他の例では<蟹>は文読で/eia<sup>35</sup>/[eie<sup>35</sup>]となる。例えば、<蟹黄>「蟹の卵」は文読で/eia<sup>35</sup>xuan<sup>213</sup>/[eie<sup>35</sup>xuan<sup>213</sup>]となる。

<咸>は荊州方言で単独で形容詞として用いるとき、白読で/xan<sup>213</sup>/[xan<sup>213</sup>]「しょっぱい」となる。例えば、<咸得很>「非常にしょっぱい」は白読で/xan<sup>213</sup>tə<sup>213</sup>xən<sup>42</sup>/[xan<sup>213</sup>tə<sup>213</sup>xən<sup>42</sup>]となる。その他の例では文読で/eien<sup>213</sup>/[eien<sup>213</sup>]となる。例えば、<咸菜>「漬物」は文読で/eien<sup>213</sup>tʂai<sup>35</sup>/[eien<sup>213</sup>tʂai<sup>35</sup>]となる。

<闲>は荊州方言で<得闲>「ひまがある」・<不得闲>「ひまがない」という2つの語句だけが白読で/xan<sup>213</sup>/[xan<sup>213</sup>]となる。その他の例では文読で/eien<sup>213</sup>/[eien<sup>213</sup>]となる。例えば、<悠闲>「のんびりしている」は文読で/iou<sup>55</sup>eien<sup>213</sup>/[iou<sup>55</sup>eien<sup>213</sup>]となる。

<项>は白読で/xan<sup>35</sup>/[xan<sup>35</sup>]となる。例えば、<项链>「ネックレス」は白読で/xan<sup>35</sup>liən<sup>35</sup>/[xan<sup>35</sup>liən<sup>35</sup>]となる。しかし、苗字として用いるとき、文読で

/eian<sup>35</sup>/[eian<sup>35</sup>]となる。例えば、〈项羽〉「秦代の将軍の名前」は文読で /eian<sup>35</sup>y<sup>42</sup>/[eian<sup>35</sup>y<sup>42</sup>]となる。また、〈款项〉「経費」は文読で /kuan<sup>42</sup>eian<sup>35</sup>/ [k<sup>h</sup>uan<sup>42</sup>eian<sup>35</sup>]となる。

以上の例をまとめると、表1のようになる。

表1：漢語中古音を保存する白読

例字	文読音の例	白読音の例	中古音の 類別
家	家庭「家庭」 /teia <sup>55</sup> thin <sup>213</sup> / [teie <sup>55</sup> thin <sup>213</sup> ]	家家「母方の祖母」 /ka <sup>55</sup> ka/ [ke <sup>55</sup> ke]	見母開口 二等字
夹	夹子「クリップ」 /teia <sup>213</sup> tsi/ [teie <sup>213</sup> tsɿ]	夹起来「挟み上げる」 /ka <sup>213</sup> tehi <sup>42</sup> lai <sup>213</sup> / [ke <sup>213</sup> te <sup>h</sup> i <sup>42</sup> lai <sup>213</sup> ]	見母開口 二等字
间	房间「居間」 /fan <sup>213</sup> teien <sup>55</sup> / [fan <sup>213</sup> teien <sup>55</sup> ]	中间「中間」 /tsuŋ <sup>55</sup> kan <sup>55</sup> / [tsuŋ <sup>44</sup> kan <sup>55</sup> ]	見母開口 二等字
戒	戒尺「教師が使う 定規」 /teio <sup>35</sup> tshi <sup>213</sup> / [teie <sup>35</sup> ts <sup>h</sup> i <sup>213</sup> ]	戒子「指輪」 /kai <sup>35</sup> tsi/ [kai <sup>35</sup> tsɿ]	見母開口 二等字
甲	甲等「いちばん よい」 /teia <sup>213</sup> tən <sup>42</sup> / [teie <sup>213</sup> tən <sup>42</sup> ]	指甲「指の爪」 /tsi <sup>213</sup> ka <sup>55</sup> / [tsɿ <sup>213</sup> ke <sup>55</sup> ]	見母開口 二等字
艰	艰辛「とても 苦しい」 /teien <sup>55</sup> ein <sup>55</sup> / [teien <sup>55</sup> ein <sup>55</sup> ]	艰难「非常に困難」 /kan <sup>55</sup> lan <sup>213</sup> / [kan <sup>55</sup> lan <sup>213</sup> ]	見母開口 二等字
角	主角「主人公」 /tsu <sup>42</sup> teio <sup>213</sup> / [tsu <sup>42</sup> teio <sup>213</sup> ]	角落「隅」 /kuo <sup>213</sup> lau <sup>55</sup> / [kuo <sup>213</sup> lau <sup>55</sup> ]	見母開口 二等字

叫	喊叫「叫ぶ」 /xan <sup>42</sup> teiau <sup>35</sup> / [xan <sup>42</sup> teiau <sup>35</sup> ]	叫花子「乞食の人」 /kau <sup>35</sup> xua <sup>55</sup> tsi/ [kau <sup>35</sup> xue <sup>55</sup> tsɿ]	見母開口 四等字
敲	敲诈「金品を ゆすり取る」 /tehiau <sup>55</sup> tsa <sup>35</sup> / [te <sup>h</sup> iau <sup>55</sup> tse <sup>35</sup> ]	敲门「ドアを叩く」 /khau <sup>55</sup> mən <sup>213</sup> / [k <sup>h</sup> au <sup>55</sup> mən <sup>213</sup> ]	溪母開口 二等字
嵌	镶嵌「象眼する」 /eian <sup>55</sup> tehian <sup>35</sup> / [eian <sup>55</sup> te <sup>h</sup> ien <sup>35</sup> ]	嵌进去「嵌め込む」 /khan <sup>55</sup> tein <sup>35</sup> khui/ [k <sup>h</sup> an <sup>55</sup> tein <sup>35</sup> k <sup>h</sup> ui]	溪母開口 二等字
去	去年「昨年」 /tehy <sup>35</sup> liən <sup>213</sup> / [te <sup>h</sup> y <sup>35</sup> lien <sup>213</sup> ]	回去「帰る」 /xuəi <sup>213</sup> khui <sup>35</sup> / [xuei <sup>213</sup> k <sup>h</sup> ui <sup>35</sup> ]	溪母合口 三等字
下	下面「下の方」 /eia <sup>35</sup> mien <sup>35</sup> / [eiə <sup>35</sup> mien <sup>35</sup> ]	底下「下」 /ti <sup>42</sup> xa/ [ti <sup>42</sup> xə]	匣母開口 二等字
蟹	蟹黄「蟹の卵」 /eio <sup>35</sup> xuan <sup>213</sup> / [eiə <sup>35</sup> xuan <sup>213</sup> ]	螃蟹「蟹」 /phan <sup>213</sup> xai <sup>42</sup> / [p <sup>h</sup> an <sup>213</sup> xai <sup>42</sup> ]	匣母開口 二等字
咸	咸菜「漬物」 /eian <sup>213</sup> tshai <sup>35</sup> / [eian <sup>213</sup> ts <sup>h</sup> ai <sup>35</sup> ]	咸得很「非常にしょっぱい」 /xan <sup>213</sup> tə <sup>213</sup> xən <sup>42</sup> / [xan <sup>213</sup> tɿ <sup>213</sup> xən <sup>42</sup> ]	匣母開口 二等字
闲	悠闲「のんびり している」 /iou <sup>55</sup> eian <sup>213</sup> / [iou <sup>55</sup> eian <sup>213</sup> ]	得闲「ひまがある」 /tə <sup>213</sup> xan <sup>213</sup> / [tɿ <sup>213</sup> xan <sup>213</sup> ]	匣母開口 二等字
项	款项「経費」 /khuan <sup>42</sup> eian <sup>35</sup> / [k <sup>h</sup> uan <sup>42</sup> eian <sup>35</sup> ]	项链「ネックレス」 /xan <sup>35</sup> liən <sup>35</sup> / [xan <sup>35</sup> lien <sup>35</sup> ]	匣母開口 二等字

表1では、見母字・溪母字・匣母字の声母は荊州方言の白読においてそれぞれ/k/・/kh/・/x/であり、荊州方言の文読においてはそれぞれ/te/・/teh/・/e/である。そして、中古音の体系では、見母字・溪母字・匣母字の声母の推定

音価<sup>4</sup>はそれぞれ/k/・/kh/・/ɣ/である。しかし、それぞれ現代の標準語では/te/・/teh/・/e/に対応する。

したがって、以下の規則が推測できる。荊州方言の白読音では、見母字・溪母字の声母は中古音の発音を保存しており、匣母字の声母は中古音から無声化した結果であると考えられる。一方、標準語における見母字・溪母字・匣母字の声母は中古音から硬口蓋化している。そして、荊州方言の文読音は標準語の影響を受けている。見母字・溪母字・匣母字の文読音の声母は標準語の声母と同様になったと考えられる。

荊州方言の文読は標準語に由来する。しかし、荊州方言の音韻体系は標準語と異なるゆえに、音価に差異が生じる。ここで簡単に説明しておきたい。

荊州方言の声母では/n/・/z/がない。したがって、標準語に/n/・/z/<sup>5</sup>を声母とする字は荊州方言において声母がすべて側面接近音/l/として導入されている。また、荊州方言の声母ではそり舌音/tʂ/・/tʂh/・/ʂ/がない。このことから、標準語に/tʂ/・/tʂh/・/ʂ/を声母とする字は荊州方言において声母がすべて歯茎音/ts/・/tsh/・/s/で対応している。

そして、荊州方言の韻母に軟口蓋音/ŋ/を韻尾とする/an/・/əŋ/・/iŋ/がない。このことから、標準語における/an/・/əŋ/・/iŋ/を韻母とする字は荊州方言において韻母がすべて歯茎音/n/を韻尾とする/an/・/ən/・/in/となった。また、荊州方言の文読の4つの声調の調値は白読と同様である。ただし、陰平を除き、ほかの3つの声調の調値は標準語と異なる。標準語の陰平・陽平・上声・去声の調値は荊州方言ではそれぞれ55・213・42・35に対応する。

上述の見母字・溪母字・匣母字の声母の音価をまとめると、以下の表2になる。

表2：見母字・溪母字・匣母字の声母の音価の対照表

	中古音の 再構音	荊州方言の 白読	荊州方言の 文読	標準語
見母字	/k/	/k/	/te/	/te/
溪母字	/kh/	/kh/	/teh/	/teh/
匣母字	/ɣ/	/x/	/e/	/e/

<sup>4</sup> 本研究で採用する中古音の推定音価はすべて佐藤昭（2002:12-142）を参照した。

<sup>5</sup> <日>を除き、標準語に[z]を声母としての<日>[ʐ<sup>51</sup>]は荊州方言で発音が[u<sup>213</sup>]となる。



### 3. 中古音から変化した白読

荊州方言における一部の漢字の白読は中古音を由来として変化した音価を持つ。

#### 3.1 疑母字の文白異読

荊州方言で疑母字の文白異読の現象は2つのパターンがある。

##### パターンI

〈孽〉は荊州方言で〈遭孽<sup>6</sup>〉「非常に哀れな」のみが白読で /tsau<sup>55</sup>·iə<sup>213</sup>/[tsau<sup>55</sup>·iə<sup>213</sup>]となる。その他の例では文読で /liə<sup>35</sup>/[liə<sup>35</sup>]となる。例えば、〈孽縁〉「不幸な婚姻」は文読で /liə<sup>35</sup>·yən<sup>213</sup>/[liə<sup>35</sup>·yən<sup>213</sup>]となる。

〈牛〉は白読で /iou<sup>213</sup>/[iou<sup>213</sup>]となる。例えば、〈牛奶〉「牛乳」は白読で /iou<sup>213</sup>·lai<sup>42</sup>/[iou<sup>213</sup>·lai<sup>42</sup>]となる。しかし、〈斗牛士〉「闘牛士」は文読で /təu<sup>35</sup>·liou<sup>213</sup>·si<sup>35</sup>/[təu<sup>35</sup>·liou<sup>213</sup>·sɿ<sup>35</sup>]となる。荊州方言で〈牛〉は文読で読まれる例は〈斗牛士〉1語しかない。

##### パターンII

〈岩〉は荊州方言で〈花崗岩〉「御影石」のみが白読で /xua<sup>55</sup>·kan<sup>55</sup>·ai<sup>213</sup>/[xue<sup>55</sup>·kan<sup>55</sup>·ai<sup>213</sup>]となる。その他の例では文読で /iən<sup>213</sup>/[ien<sup>213</sup>]となる。例えば、〈岩石〉「岩」は文読で /iən<sup>213</sup>·si<sup>213</sup>/[ien<sup>213</sup>·sɿ<sup>213</sup>]となる。

〈崖〉は荊州方言の白読では /ai<sup>213</sup>/[ai<sup>213</sup>]となる。例えば、〈悬崖〉「断崖」は白読で /eyən<sup>213</sup>·ai<sup>213</sup>/[eyən<sup>213</sup>·ai<sup>213</sup>]となる。しかし、〈崖〉は固有名詞（地名・人名など）として用いるとき、文読で /ia<sup>213</sup>/[ie<sup>213</sup>]となる。例えば、〈崖山〉「広東省にある山の名称」は /ia<sup>213</sup>·san<sup>55</sup>/[ie<sup>21</sup>·san<sup>55</sup>]となる。

〈咬〉は荊州方言の白読では /au<sup>42</sup>/[au<sup>42</sup>]となる。例えば、〈咬断〉「噛み切る」は白読で /au<sup>42</sup>·tuan<sup>35</sup>/[au<sup>42</sup>·tuan<sup>35</sup>]となる。しかし、〈咬〉は固有名詞として用いるとき、文読で /iau<sup>42</sup>/[iau<sup>42</sup>]となる。例えば、〈程交金〉「唐代の将軍の名前」は文読で /tshən<sup>213</sup>·iau<sup>42</sup>·tein<sup>55</sup>/[ts<sup>h</sup>ən<sup>213</sup>·iau<sup>42</sup>·tein<sup>55</sup>]となる。また、〈咬字眼〉「言葉遣いにこだわる」は文読で /iau<sup>42</sup>·tsi<sup>35</sup>·iən<sup>42</sup>/[iau<sup>42</sup>·tsɿ<sup>35</sup>·ien<sup>42</sup>]となる。

以上の疑母字の2つのパターンの文白異読をまとめると、表3のようになる。

<sup>6</sup> 標準語に〈造孽〉[tsau<sup>51</sup>·nie<sup>51</sup>]「悪事を働く」の意味と異なる。

表 3：疑母字の文白異読

類別	例字	文読音の例	白読音の例
I	孽	孽缘「不幸な婚姻」 /liə <sup>35</sup> yən <sup>213</sup> / [liɛ <sup>35</sup> yən <sup>213</sup> ]	遭孽「非常に哀れな」 /tsau <sup>55</sup> ia <sup>213</sup> / [tsau <sup>55</sup> ie <sup>213</sup> ]
	牛	斗牛士「闘牛士」 /tou <sup>35</sup> liou <sup>213</sup> si <sup>35</sup> / [tou <sup>35</sup> liou <sup>213</sup> sɿ <sup>35</sup> ]	牛奶「牛乳」 /iou <sup>213</sup> lai <sup>42</sup> / [iou <sup>213</sup> lai <sup>42</sup> ]
II	岩	岩石「岩」 /iən <sup>213</sup> si <sup>213</sup> / [iɛn <sup>213</sup> sɿ <sup>213</sup> ]	花岗岩「御影石」 /xua <sup>55</sup> kan <sup>55</sup> ai <sup>213</sup> / [xue <sup>55</sup> kan <sup>55</sup> ai <sup>213</sup> ]
	崖	崖山「広東省にある山の 名称」 /ia <sup>213</sup> san <sup>55</sup> / [ie <sup>21</sup> san <sup>55</sup> ]	悬崖「断崖」 /eyən <sup>213</sup> ai <sup>213</sup> / [eyɛn <sup>213</sup> ai <sup>213</sup> ]
	咬	咬字眼「言葉遣いに こだわる」 /iau <sup>42</sup> tsi <sup>35</sup> iən <sup>42</sup> / [iau <sup>42</sup> tsɿ <sup>35</sup> iɛn <sup>42</sup> ]	咬断「噛み切る」 /au <sup>42</sup> tuan <sup>35</sup> / [au <sup>42</sup> tuan <sup>35</sup> ]

表 3 を見られたい。疑母字の声母（中古音/ŋ/）はパターンIの〈牛〉・〈孽〉の白読において、声母が脱落し、零声母になった。しかし、標準語の疑母字の声母は歯茎化し、/n/となった。荊州方言の文読は標準語の影響を受けたが、荊州方言の声母には歯茎鼻音/n/がない。そのため、文読においては調音点が共通する歯茎側面接近音/l/として導入された。パターンIの疑母字の文白異読における声母の変化の規則をまとめると、図1のようになる。

図 1：パターンIの疑母字の文白異読における声母の変化の規則

中古音：/ŋ/→荊州方言の白読：零声母 中古音：/ŋ/→標準語：/n/→荊州方言の文読：/l/
--

一方で、疑母字の声母（中古音/ŋ/）はパターンIIの〈岩〉・〈崖〉・〈咬〉の白

読において、声母が脱落し、零声母になった。しかし、パターンIIの疑母字の文読は標準語の影響を受け、声母も零声母になり、標準語と似ている発音になった。パターンIIの疑母字の文白異読における声母の変化の規則をまとめると、図2のようになる。

図2：パターンIIの疑母字の文白異読における声母の変化の規則

中古音：/ŋ/→荊州方言の白読：零声母
中古音：/ŋ/→標準語：零声母→荊州方言の文読：零声母

パターンIとパターンIIの変化の規則の条件は疑母字の所属する韻母に関する。パターンIに入る<牛>は流撮開口三等平声尤韻字、<孽>は山撮開口三等入声薛韻字である一方、パターンIIに入る<岩>は咸撮開口二等平声銜韻字、<崖>は蟹撮開口二等平声佳韻字、<咬>は効撮開口二等上声肴韻字である。下の表4を見られたい。

表4：疑母字の韻母の音価の対照表

類別	例字	中古音 の 再構音	荊州 方言 の 白読	荊州 方言 の 文読	標準語	中古音の韻類
I	孽	/iæŋ/	/iə/	/iə/	/iə/	三等開口入声
	牛	/iəu/	/iou/	/iou/	/iou/	三等開口平声
II	岩	/am/	/ai/	/iən/	/iən/	二等開口平声
	崖	/æi/	/ai/	/ia/	/ia/	二等開口平声
	咬	/au/	/au/	/iau/	/iau/	二等開口上声

表4を見ると、分析し、以下の規則を見つけた。該当する例が少ないので、判断は難しいところもあるが、現時点で見つかっている例を検討すると、三等韻の疑母字はパターンIの変化の規則に従う。それに対して、二等韻の疑母字はパターンIIの変化の規則に従う。そして、中古音で介音/i/を持つ疑母字はパターンIの変化の規則に従う。それに対して、介音/i/を持たない疑母字はパターンIIの変化の規則に従う。また、文白異読の現象を持つ疑母字はすべて

開口字である。

### 3.2 疑母字以外の中古音を由来とする文白異読

疑母字以外の中古音を由来とする白読音もある。具体例は以下である。

滂母字〈噴〉は荊州方言で単独で動詞として用いるとき、白読で/fən<sup>35</sup>/[fən<sup>35</sup>]となる。例えば、〈噴水〉「水を噴く」は白読で/fən<sup>35</sup>suəi<sup>42</sup>/[fən<sup>35</sup>suei<sup>42</sup>]となる。その他の例では文読で/phən<sup>55</sup>/[p<sup>h</sup>ən<sup>55</sup>]となる。例えば、〈噴泉〉「噴水」は文読で/phən<sup>55</sup>təhyən<sup>213</sup>/[p<sup>h</sup>ən<sup>55</sup>tə<sup>h</sup>yən<sup>213</sup>]となる。

清母字〈湊〉は荊州方言で単独で動詞として用いるとき、白読で/tehiou<sup>35</sup>/[te<sup>h</sup>iou<sup>35</sup>]となる。例えば、〈湊流〉「大勢に従う」は白読で/tehiou<sup>35</sup>liou<sup>213</sup>/[te<sup>h</sup>iou<sup>35</sup>liou<sup>213</sup>]となる。その他の例では文読で/tshou<sup>35</sup>/[ts<sup>h</sup>ou<sup>35</sup>]となる。例えば、〈湊合〉「間に合わせる」は文読で/tshou<sup>35</sup>xuo/[ts<sup>h</sup>ou<sup>35</sup>xuo]となる。

定母字〈大〉は荊州方言で〈大亏〉「大損失」のみが白読で/thai<sup>42</sup>khuəi<sup>55</sup>/[t<sup>h</sup>ai<sup>42</sup>k<sup>h</sup>uei<sup>55</sup>]となる。その他の例では文読で/ta<sup>35</sup>/[tə<sup>35</sup>]となる。例えば、〈大人〉「大人」は文読で/ta<sup>35</sup>lən<sup>213</sup>/[tə<sup>35</sup>lən<sup>213</sup>]となる。

邪母字〈像〉は荊州方言の白読では/tehian<sup>55</sup>/[te<sup>h</sup>ian<sup>55</sup>]となる。しかし、〈四不像〉は荊州方言で2つの発音がある。白読で/si<sup>35</sup>pu<sup>213</sup>tehian<sup>55</sup>/[sɿ<sup>35</sup>pu<sup>213</sup>tə<sup>h</sup>ian<sup>55</sup>]となり、「何も似ていない」という意味である。文読では/si<sup>35</sup>pu<sup>213</sup>əian<sup>35</sup>/[sɿ<sup>35</sup>pu<sup>213</sup>əian<sup>35</sup>]となり、「シフゾウ」（動物の一種）という意味である。荊州方言で〈像〉は文読で読まれる例は〈四不像〉1語しかない。

影母字〈啞〉は白読で/a<sup>42</sup>/[e<sup>42</sup>]となる。例えば、〈啞巴〉「啞者」は白読で/a<sup>42</sup>pa<sup>55</sup>/[e<sup>42</sup>pə<sup>55</sup>]となる。しかし、〈聾啞人〉「聾啞者」は文読で/luŋ<sup>213</sup>ia<sup>42</sup>lən<sup>213</sup>/[luŋ<sup>213</sup>ie<sup>42</sup>lən<sup>213</sup>]となる。荊州方言で〈啞〉は文読で読まれる例は〈聾啞人〉1語しかない。

疑母字以外の中古音を由来とする文白異読をまとめると、表5のようになる。

表5：疑母字以外の中古音を由来とする文白異読

例字	文読音の例	白読音の例	中古音の 類別
噴	噴泉「噴水」 /phən <sup>55</sup> təhyən <sup>213</sup> / [p <sup>h</sup> ən <sup>55</sup> tə <sup>h</sup> yən <sup>213</sup> ]	噴水「水を噴く」 /fən <sup>35</sup> suəi <sup>42</sup> / [fən <sup>35</sup> suei <sup>42</sup> ]	滂母字

湊	湊合「間に合わせる」 /tshou <sup>35</sup> xuo/ [ts <sup>h</sup> ou <sup>35</sup> xuo]	湊流「大勢に従う」 /tehiou <sup>35</sup> liou <sup>213</sup> / [te <sup>h</sup> iou <sup>35</sup> liou <sup>213</sup> ]	清母字
大	大人「大人」 /ta <sup>35</sup> lən <sup>213</sup> / [tə <sup>35</sup> lən <sup>213</sup> ]	大亏「大損失」 /thai <sup>42</sup> khuei <sup>55</sup> / [t <sup>h</sup> ai <sup>42</sup> k <sup>h</sup> uei <sup>55</sup> ]	定母字
像	四不像「シフゾウ、 動物の一種」 /si <sup>35</sup> pu <sup>213</sup> ciaŋ <sup>35</sup> / [sɿ <sup>35</sup> pu <sup>213</sup> ciaŋ <sup>35</sup> ]	四不像「何も似ていない」 /si <sup>35</sup> pu <sup>213</sup> tehiaŋ <sup>55</sup> / [sɿ <sup>35</sup> pu <sup>213</sup> tə <sup>h</sup> iaŋ <sup>55</sup> ]	邪母字
啞	聋啞人「聾啞者」 /luŋ <sup>213</sup> ia <sup>42</sup> lən <sup>213</sup> / [luŋ <sup>213</sup> iə <sup>42</sup> lən <sup>213</sup> ]	啞巴「啞者」 /a <sup>42</sup> pa <sup>55</sup> / [ɛ <sup>42</sup> pə <sup>55</sup> ]	影母字

表 5 に対して補足説明を行う。滂母字の声母（中古音/ph/）は<噴>の白読において摩擦音/f/となった。清母字の声母（中古音/tsh/）は<湊>の白読において硬口蓋化し、/teh/となった。定母字の声母（中古音/d/）は<大>の白読において無声有気化し、/th/となった。邪母字の声母（中古音/z/）は<像>の白読において破擦音/teh/となった。<啞>は影母字であったとされるが、荊州方言の白読では零声母になった。一方で、<噴>・<湊>・<大>・<像>・<啞>の文読は標準語の影響を受け、標準語と類似した発音となった。荊州方言においては、<噴>・<湊>・<大>・<像>・<啞>を除き、ほかの滂母字・清母字・定母字・邪母字・影母字の白読はすべてなくなり、標準語と類似した文読音のみを保存している。

#### 4. 特定の語彙に見られる白読

荊州方言のごく一部の漢字は特定の語彙において白読で読まれる。例えば、<今日>「今日」・<明日>「明日」・<昨日>「昨日」・<前日>「おととい」<sup>7</sup>はそれぞれ白読で/tei<sup>55</sup>u/[tei<sup>55</sup>u]・/mə<sup>213</sup>u/[mɿ<sup>213</sup>u]・/tshuo<sup>213</sup>u/[ts<sup>h</sup>uo<sup>213</sup>u]・/tehia<sup>213</sup>u/[tə<sup>h</sup>ie<sup>213</sup>u]となる。しかし、<今>・<明>・<昨>・<前>はその他の例では、文読で読まれ、/tein<sup>55</sup>/[tein<sup>55</sup>]・/min<sup>213</sup>/[min<sup>213</sup>]・/tsuo<sup>213</sup>/[tsuo<sup>213</sup>]・/tehia<sup>213</sup>/[tə<sup>h</sup>ien<sup>213</sup>]となる。したがって、<今>・<明>・<昨>・<前>も文白異読を認められること

<sup>7</sup> ちなみに<后日>「あさって」は/xou<sup>35</sup>u/[xou<sup>35</sup>u]となる。<后>は荊州方言で/xou<sup>35</sup>/[xou<sup>35</sup>]という音価しか持たない。

ができる。

## 5. 同字異調の白読

荊州方言では文読音と白読音において声母と韻母が共通するものの、声調のみが異なる場合がある。具体例は以下である。

〈求〉は「媚びる」を表すとき、白読で/tehiou<sup>42</sup>/[te<sup>h</sup>iou<sup>42</sup>]となる。その他の例ではすべて文読で/tehiou<sup>213</sup>/[te<sup>h</sup>iou<sup>213</sup>]となる。例えば、〈請求〉「頼む」は文読で/tein<sup>42</sup>tehiou<sup>213</sup>/[tein<sup>42</sup>te<sup>h</sup>iou<sup>213</sup>]となる。

〈挖〉は「ぼったくる」を表すとき、白読で/ua<sup>213</sup>/[ue<sup>213</sup>]となる。その他の例ではすべて文読で/ua<sup>55</sup>/[ue<sup>55</sup>]となる。例えば、〈挖出来〉「掘り出す」は文読で/ua<sup>55</sup>tshu<sup>213</sup>lai<sup>213</sup>/[ue<sup>55</sup>ts<sup>h</sup>u<sup>213</sup>lai<sup>213</sup>]となる。

〈盯〉は「監視する」を表すとき、白読で/tij<sup>213</sup>/[tiŋ<sup>213</sup>]となる。その他の例ではすべて文読で/tij<sup>55</sup>/[tiŋ<sup>55</sup>]となる。例えば、〈盯倒看〉「じっと目を凝らす」は文読で/tij<sup>55</sup>tau<sup>42</sup>khan<sup>35</sup>/[tiŋ<sup>55</sup>tau<sup>42</sup>k<sup>h</sup>an<sup>35</sup>]となる。

〈調〉は多音字であり、1個の白読音と2個の文読音を持つ。単独で動詞として「交換する」を表すとき、白読で/thiau<sup>42</sup>/[t<sup>h</sup>iau<sup>42</sup>]となる。例えば、〈調分子〉「紙幣を硬貨に両替する」は/thiau<sup>42</sup>fən<sup>55</sup>tsi/[t<sup>h</sup>iau<sup>42</sup>fən<sup>55</sup>tsi]となり、〈調位子〉「座席を交換する」は/thiau<sup>42</sup>uei<sup>35</sup>tsi/[t<sup>h</sup>iau<sup>42</sup>uei<sup>35</sup>tsi]となる。一方、文読で/thiau<sup>213</sup>/[t<sup>h</sup>iau<sup>213</sup>]或いは/tiau<sup>35</sup>/[tiau<sup>35</sup>]となる。例えば、〈調整〉「調整する」は/thiau<sup>213</sup>tsən<sup>42</sup>/[t<sup>h</sup>iau<sup>213</sup>tsən<sup>42</sup>]となり、〈調動〉「変える」は/tiau<sup>35</sup>tun<sup>35</sup>/[tiau<sup>35</sup>tun<sup>35</sup>]となる。

〈里〉が白読/li<sup>55</sup>/[li<sup>55</sup>]で読まれるのは〈捏里〉「ここ」・〈那里〉「あそこ」・〈里头〉「なか」・〈窠里〉「ちいさい物のなか」の4つの語彙しかない。これらはそれぞれ/li<sup>35</sup>li<sup>55</sup>/[li<sup>35</sup>li<sup>55</sup>]・/luo<sup>35</sup>li<sup>55</sup>/[luo<sup>35</sup>li<sup>55</sup>]・/li<sup>55</sup>thou/[li<sup>55</sup>t<sup>h</sup>ou]・/tou<sup>35</sup>li<sup>55</sup>/[tou<sup>35</sup>li<sup>55</sup>]となる。その他の例ではすべて文読で/li<sup>42</sup>/[li<sup>42</sup>]となる。例えば、〈邻里之间〉「近所の間」は文読で/lin<sup>213</sup>li<sup>42</sup>tsi<sup>55</sup>teien<sup>55</sup>/[lin<sup>213</sup>li<sup>42</sup>tsi<sup>55</sup>teien<sup>55</sup>]となる。

## 6. おわりに

荊州方言の文白異読は4種のタイプが認められる。すなわち、中古音を保存している白読・中古音から変化した白読・特定の語彙に見られる白読・同詞異調の白読である。荊州方言の白読と文読はそれぞれ発展のプロセスが異なる。白読は中古音から形成され、文読は標準語から導入されて成立した。荊州方言の白読に中古音の体系から考えれば保守的なものも同時に、改新的だと考えられるものもある。一方、荊州方言の文読は標準語の影響を受け、非常に類似した音価を持つ。ただし、荊州方言の音韻体系は一部で標

標準語と異なることから、標準語の音価を導入したとき、荊州方言の音韻体系に合わせたかたちで、荊州方言の文読に入る。

今後の課題は荊州方言の文白異読の現象と強く関係する民間語源について詳しく検討していきたい。そして、荊州方言における民間語源の文化の内包を深く探究することを目指す。

#### 参考文献

##### [汉语]

- 陈荣岚, 李熙泰 (1994) 《厦门方言》 厦门: 鹭江出版社, 19-31 页  
丁声树, 李荣 (1981) 《古今字音对照手册》 北京: 中华书局, 1-212 页  
盧廣誠 (2003) 《臺灣閩南語概要》 台北: 南天書局: 141-145 页  
王力 (1997) 《王力语言学词典》 济南: 山东教育出版社, 572-573 页  
王群生 (1994) 《湖北荆沙方言》 武汉: 武汉大学出版社, 3-118 页  
王群生, 王彩豫 (2018) 《荆州方言研究》 武汉: 华中师范大学出版社, 20-114 页  
中国社会科学院语言研究所 (1981) 《方言调查字表》 北京: 商务印书馆, 1-80 页

##### [日本語]

- 佐藤昭 (2002) 『中国語語音史』 東京: 白帝社, pp.12-142

